




# 墮落の研究室

**開始条件:** レベル5のスペルウィーヴァー

**目的:** 宝箱を略取した後、開始位置  より脱出

## 序幕:

力は墮落する。スペルウィーヴァーなら誰もが知っている。それを気にするのは、スペルウィーヴァーの真言の一部だからだ。

だが力が暗黒面に陥ろうとも、それを恐れてはいけない。進むべき道が目の前にあるなら、その力を受け容れねばならない。

こういった思考が、混成区へと導いてくれた。ここで強力な混合薬を見つけようと思ったのだ。その結果、ちっぽけな錬金術店の外に立ち、赤顔のクワトリルを見下ろすことになった。

「あー、あなたが時間通りに着いたことを、大層の木に感謝しないとね」彼は一気にまくしたて、一息つくために休止する。「ちょうど一服、完成させたところだったんですよ。えーとお、ところがわたしの被験者どもがっ、あー、その力のせいでっ、ひどく攻撃的になったのですよっ。

わたしはですねっ、命からがら逃れたんですよ。それで運悪くその秘薬を、地下室に置き忘れてしまったのですねっ。部下に見張らせていますが」

クワトリルは扉のほうを指差した。「すみませんねっ。被験者どもがっ、わたしの研究室を荒らしてしまったのですよっ。薬が欲しいのならばっ、連中のいる場所を突破しなければなりませんねっ」

口をつぐんだまま、木造の建物の入口をくぐった。力は墮落する。それは予想もつかない場所で、顕現するのだ。

## 特別ルール:

扉 **a** は施錠されています。宝箱が略取されたとき、**1** を読んでください。



戸棚から赤黒い秘薬を取りあげた。その瞬間、背後の扉がパタンと音を立てて閉まった。

「ソレハ主人ノ物デス。返シテクダサイ」

振り向くと、大きな影が見えた。石のゴーレムが逃げ道を塞いでいる。これがあの錬金術師のクワトリルが言っていた“部下”に違いない。運のないことに、このゴーレムを倒さない限り、ここから出ることはできないだろう。

## 特別ルール:

扉 **b** はただちに施錠されます。扉の向こう側にいる全モンスターは休止状態になり、扉 **b** が再び開かれるまで行動しません。

通常モンスターの石のゴーレムを1体、ヘクス **c** に配置します。この石のゴーレムが倒されたとき、扉 **a** **b** は開きます。

## 終幕:

店の裏手から出て、陽光の下に出た。墮落したモンスターどもは、間近まで追いつがってくる。あの錬金術師が、叩きつけるように背後で扉を閉ざし、何本ものボルトでしっかり施錠した。モンスターたちは金切り声をあげたり、怒ったように木の扉を叩いたりした。

「お見受けしたところっ、すべてを持ってきたわけではないですねっ」クワトリルは何かを考えているようだった。「まあいいでしょう。それはこちらの問題ですからっ。少なくとも、秘薬を見つけたわけですねっ。よかったです。この状況すべてを鑑みるに、とにかくあなたは、タダで秘薬を得ることができたというわけだしっ」

クワトリルに助力を申し出ようか考え、やめた。この状況では、もう自分はほとんど役に立たないだろう。部屋に戻って休息すべき時間だ。その後で、新しく得たこの力の限界を試してみよう。

## 報酬:

アイテム 136 番〈揮発性霊薬〉

使用する地形タイル:

G2b  
I1b  
A1b  
A2a



黒インプ



唾吐き  
ドレーク



石の  
ゴーレム



宝箱  
(× 1)



負傷の鳥  
(× 5)



階段  
(× 2)



木箱  
(× 2)



本棚 (× 4)

樽 (× 2)



目標